



あやめだより

令和5年2月号

校長 戸田 太郎

今年は久しぶりに、正月の風物詩「箱根駅伝」の全区間をテレビで観戦しました。各ランナーの必死の形相から、走り出す何年も前から様々なことを背負っていることがうかがえ、心が震えます。当日までの押しつぶされそうなプレッシャーや仲間でありライバルであるチームメイトとの競争、体調管理など多くの壁を乗り越えてきたのでしょうか。テレビ画面越しからでも、全てのランナーの表情が眩しく感じとれます。

レースの様子をずっと見てみると、今走っているランナーが、この場に立つまでの思いを聞いてみたくくなります。同時に、給水などのサポートに回った選手や、実際に走る10名を選抜した監督の思いにも触れてみたくくなります。きっと、見ている人には決して分からない、様々な感情が積み重なった上の箱根駅伝だったと思われれます。

さて、今年度も一足早く読ませていただいた、卒業アルバム。そこには、6年生の素直な思いが溢れていました。6年間の思い出や将来の夢、周囲の人への感謝の気持ちが、個性豊かに綴られています。6年生は、小学校で一人一人がかげがえのない経験を積み、卒業していきます。小学校での経験のうち、たった1つでもよいので、人生のどこかで生かしてくれると嬉しいです。

間もなく卒業していく6年生。

箱根のランナーのように速くなくて構いません。ゆっくりでもよいので、見ていて眩しく感じられるような、幸せな人生を歩んでほしい。長岡南小学校の全教職員の心からの願いを襷に託します。

卒業後も、力一杯の応援を続けます。

